

## 事例研究法による母子関係の研究

田畑洋子・望月久乃

### Case Studies of the Mother - Child Relationship

Hiroko TABATA and Hisano MOCHIZUKI

#### 問題と目的

臨床心理学の始まりは、1896年のL. Witmerによる心理治療クリニックの創設であるといわれている (Reisman, J. M., 1976)。出発のいきさつからも明らかなように、臨床心理学に期待されている役割は「心理的な要因からくる病」をもつ者のベッドサイドに居ること、すなわち心理的な悩み・苦しみをもちつ者への心理学的な援助である。さらに最近では、悩みや苦しみを除去する援助のみではなく、健康な者がよりよく生きるための援助にまで、その守備範囲は拡大されてきている。

Korchin, S. J. (1980)は『臨床心理学小史』において、20世紀初頭から第2次大戦終了後までの歩みを纏めている。その中で「臨床心理学は臨床的態度、つまり心理的に苦しんでいる個人を理解し援助することへの関心によって、最もはっきりと定義される」といつている。

臨床心理学をこのように「個人(および集団)への理解と援助」の学とするならば、そこでは以下のような人間が想定されている。

①現時点においては、心理的な脅威や不安を感じていて、個人的・社会的な生活も不適應の状態にあるが、心理的成長により、その状態は‘変化’する可能性をもつこと。または、現在、特別な問題を持たなくとも、さらなる成長により、よりよく自己を生かしていく生き方へと‘変化’する可能性をもつこと。

②その変化は他者との‘関係’の中で起ってくる。立場により、多少の相違はあっても、心理療法はセラピストとの関係によって行われる。精神分析においては、‘転移’と‘逆転移’の概念によって説明され、来談者中心療法では、カウンセラーが‘共感的および受容的態度’をクライアントに伝え得た時、クライアントの人格変容が起こるとしている。心理治療におけるこのような特殊な関係ばかりではなく、人は家族をはじめとして、多様な人間関係の絡みの中で生きている。人格の変化は関係の変化との関連で起ってくる。

③ある特定の時間で切り取られ、固定化された人ではなくて、‘時間’経過の流れのなかにある人であること。すなわち、クライアントとセラピストの関係は一定の期間持続し、その時間の中で、変化が徐々に起ってくるのである。それはあたかも昆虫が卵から幼虫へ、さなぎを経て成虫へと時間をかけて変容する如くである。その時間の流れの速さはクライアント以外の何人も規定することは出来ない。

④最後に代替のきかない‘独自性’と‘個別性’を備えた人であること。その人のもつ問題

や症状はその人にとっての独自の意味を担っている。問題や症状にどのように向き合うか、どのように受け入れて、その生き方を選んでいくかについては一般化することは出来ない。そこに織り成されるのはその人の独自の物語である。

その人独自の物語を関係性の中で、時間をかけて読み解いていくのが臨床心理学における日常的な業務であり、研究の基本的な姿勢であると考えられる。とすれば、研究法としては法則定立的な実験法や調査法より、個性記述的な事例研究法が主として使われることになる。しかし、事例研究法に関しては‘客観性に欠ける’、‘一般化出来ない’という他の心理学分野からの批判もなされている。また臨床心理学に身を置く者自身が方法論の脆さを感じているのも事実である。

一方、母子関係については、観察法や実験法あるいは調査法による研究が従来から行われ、子どもの発達に及ぼす母子関係の影響について、それぞれに重要な知見を見つけ出している (Symonds, P.M., 1939, Bowlby, J., 1969, 1973, 1980)。乳幼児精神医学の分野においても発達早期における母子関係がその後の人格形成に与える重要性について言及されている (Call, J. et al, 1981, 小此木, 1989, Mahler, M. S., 1975, Winnicott, D. W., 1965)。

心理臨床の実践を通して感じるのは、母親と子ども、および両者の関係がセラピストとの関係に支えられて時間を追って変化し、その変化が子どもの成長に影響することである。その変化の様相は幾つかの事例研究として報告されている。

そこで、本論における目的は以下の2点とする。

- (1) 臨床心理学における事例研究法についての文献展望を行い、その意義について考察する。
- (2) 臨床心理学に関する専門誌に発表されている事例研究の中から、母子関係に関する考察がされている論文を検索し、形式的側面からの整理分析を行う。

## 臨床心理学における事例研究法

### 1. 事例報告から事例研究へ

先述したように、事例研究は日常の臨床実践の中で行われているが、研究法としての事例研究法と明確な区別なく使われていることも多く、そのために議論の混乱も引き起こしている。

事例研究については細木 (1968) が「人間に関する諸問題を、具体的な個人について、一般の中に位置づけながら、多面的に分析し、系統的総合的に理解把握し、個別的具体的に問題解決の処理を立案すること」と定義し、アプローチの仕方の特徴として、次の4点をあげている。

(1) 不適応を示す個人を焦点として接近する。(2) 個々のケースを、それ自体において、また、それをとりまく環境との間に、有機的連関と力動的相互作用を有する全体的まとまりがあるものとみなす。(3) 縦断的追及に対しても、全体的・力動的観点がとられる。(4) 主要な用具は、心理テストや行動観察による対象者の把握であり、心理療法をも含めた面接法である。この時期は心理臨床において実践のためのより効果的な方法を模索していた時期であり、事例研究と事例研究法の区別はいまだ明確ではなかったと考えられる。その後、次第に臨床心理学独自の研究方法が求められるようになる。

石郷岡 (1969) は「臨床心理学における理論構成」の問題を取り上げ、臨床心理学の確立は、その目的達成に関係すると考えられるあらゆる心理学的要因を包含し、それを統一する仮説的な体系をつくること、そしてこの体系の妥当性を実践的ならびに客観的研究によって確かめていくことによって、果たされるべきものである。そして、この確立の方法を明らかにするものが、臨床心理学研究法であるという。

また、星野（1970）は「事例研究か症例報告か」の項において、事例研究は「目的がはっきりと示されなければならない。そして、一定の目的に沿ってさまざまな情報が集められ、系統的総合的な理解に達しなければならないのである」と述べ、事例研究の目的として以下の6項をあげている。(1) 特異例、(2) 新しい技法、(3) 見解の例示、(4) 現行学説への挑戦、(5) 仮説と理論の証明と確認、(6) データの蓄積である。

1974年には京都大学教育学部心理教育相談室が「臨床心理事例研究」を創刊して、以後、各大学付属の心理教育相談室における紀要発行の先鞭をつけることになる。

苧阪（1974）は、臨床心理学において、先輩から直接に臨床体験を伝承することの重要性について触れながらも、「伝承から開発へとむかわなければいけない」、「臨床心理学を研究する者といえども、単に臨床経験だけに閉じこもることなく、逆説的ではあるけれども、広く心理学全体の学問体系を身につけて、人間に対する多面的な見方を体得しておく必要がある」と序文を寄せている。実践重視に偏り、学問としての発展が疎かになりがちな臨床心理学に対しての実験心理学の学徒からの警告といえよう。

「臨床心理事例研究」第3巻においては、事例研究法についての特集が組まれて、精神医学の分野から藤縄（1976）、発達心理学から中島（1976）、臨床心理学から河合（1976）、実験心理学の分野からは苧阪（1976）がそれぞれ稿を寄せている。

河合は科学論文の条件として次の5点をあげている。すなわち(1) 新しい技法の提示、(2) 新しい理論、見解の提示、(3) 治療困難とされるものの治療記録、(4) 現行学説への挑戦、(5) 特異例である。これらの条件は先の星野が上げる条件とほぼ同じであり、事例研究を研究たらしめるための努力目標であると考えられる。また、河合は事例研究に関わる本質的な問題として「普遍性」をとりあげている。即ち、個をあくまでも追究する所に出てくる「普遍性」と多くの事例に共通に見られる「法則の普遍性」とはどう違うかという問題である。この両者の区別について、個人の世界において、その「個」を明らかにすればするほど、それは普遍性をもつものであるといった逆説的表現をとるより仕方がないという。そして、事例を一つの世界として社会の動きをも読みとれるというほどの意味を見い出せば、「ひとつの事例研究が前説に述べたような(1)～(5)のカテゴリーにあてはまらなくとも、十分に論文としての意義をもつことが可能であると考えられる。しかし、そのときは臨床心理学を自然科学の枠外にまではみでるものとして位置づけることが必要となってくるであろう」という。また「事例研究の道は臨床心理学における第3の道を切り拓くのみならず、自然科学そのものに対しても、ひとつの新しい展開をもたらすことになるかもしれないとさえ思っている」と、自然科学の枠組みを超える事例研究の意義を示唆している。

この「個」と「普遍性」の問題は事例研究を研究へと高めるためにも、また臨床心理学における本質的な問題としても種々に論じられている。

1977年には『臨床心理ケース研究』が創刊され、「臨床心理学におけるケース研究」と題しての編者鼎談（河合、佐治、成瀬、1977）が行われている。

「個別から一般化への道」についても論議され、河合は「典型」（タイプス；Typus）という言葉を使い、ひとつをぐっと掘り下げると、すべての物事を上でカバーするようなものであると説明している。あるいは、「セラピストとクライアントの関係も全部含んでのケース」を個々に書き進んでいくと、全体としてのゲシュタルトが出来てきて、それが普遍性をもつのではないかという言い方もしている。

「日本心理臨床学会」第4回大会においては「事例研究とは何か」と題するシンポジウム（小川、

1986)が行われ、精神医学の立場から小此木、哲学の立場から中村、臨床心理学の立場から河合がそれぞれ発言している。河合は「個から普遍に至る」ためには、相当なインボルメントを体験しつつ、なおそれを見ている目が必要であるといい、その時の意識状態について「対象に巻き込まれつつ、なお、意識の火を消してしまわないというあたりの意識の状態」であり、対象から自分をはっきり分離して物事を観察するといった自然科学における意識状態と違うのではないかという。そこで「自分もそこに入れこんだ世界を全体としてその人がどう生きようとしているのか」とする「コスモロジー (cosmology)」の概念を出している。

中村は哲学者として、概念的な整理を行なっている。コスモロジーは、なんらかの意味において一つの意味の構図、コンフィギュレーション (configuration) を持った世界だと考えている。また、ギリシャ的知と共に、重要な知の伝統としてのローマ的知を掘り起こすと「臨床の知」(中村、1992)ということになり、臨床の知や事例研究は非常に重要な流れにつながっていると、事例研究に対しての深い意味づけがなされている。

浅海(1990)は事例研究をめぐって諸家のあげる方法論的問題点をまとめている。方法論的疑問として出されているのは「物語的に示されるデータが多く信頼性に欠ける」、「因果関係を説明できるための統制が殆どない (e.g. Runyan, W.M., 1983)」など、あるいは「一事例についての結果から一般化することができない (e.g. Bolgar, H., 1965)」ことであり、「科学的研究の目標である仮説の検証・法則定立の力はないとする (e.g. DeGrott, A.D., 1969)」主張が多いとしている。そして、批判的立場をとるものは、主張の基盤を自然科学的アプローチに置き、主客分離したところで、対象を機械的因果の枠組みからみていくことを根本としているという。

事例研究を擁護する立場としては次の6項をあげている。

(1) Lewin, K. (1935) の純粹事例に関する主張、(2) Allport, G.W. (1942) の個性記述的方法の主張、(3) 人間性心理学 (Rogers, C. R. 1963) の主張、(4) Single-case アプローチ (Leitenberg, H., 1973; Robinson, P.W. & Foster, D.F., 1979) の主張、(5) 精神分析における Lorenzer, A. (1974) の主張、(6) 中村の「臨床の知」の主張である。

浅海は、研究の強調点の相違についても述べている。「人間や心理学そのものをどうとらえるかに関する立場の違いがあらわれてくるのである」し、「臨床心理学が生身の人間全体を扱う領域として、その最も先鋭化した問題意識に相対せざるをえないのも当然のことといえるであろう」という。

同じ臨床心理学の分野においても、法則定立的な研究を目指す立場もあるし、あくまでも個の世界の理解をめざす立場もある。つきつめれば研究者自身の間観や人生観が問われることになり、人間を直接的に扱う学問の複雑さを示している。

## 2. “自然科学パラダイム” から “人間科学パラダイム” へ

下山(1996)は臨床心理学の実践性そのものを対象とすることから始め、臨床心理学研究法の可能性について論じている。

下山はまず心理学研究法の段階的分類を行う。「データ収集の場の型」として、「実験」、「調査」、「実践」を、「データ収集の方法」として、「検査」、「観察」、「面接」を、「データ処理の方法」として「質的と量的」、「記述と分析」の各組み合わせを考えている。研究のタイプとしては「個性記述と法則定立」、「仮説生成と仮説検証」の組み合わせが考えられる。

臨床心理学で中心を占めるのは「実践—面接—質的データの記述」や個性記述的研究であり、仮説生成的である。敢えて「実践」を「実験」・「調査」と同等に位置付けているが、これは、心理学を生活している人間に具体的に関わりつつ、人間のあり方を研究する‘知の技法’とし

て位置づけていくことと密接な関連をもっている。そして自然科学の枠を越え、実践を研究の一部として含む研究パラダイムを「人間科学のパラダイム」と命名している。この人間科学のパラダイムに立つ場合は、実践を研究として発展させていく根拠が与えられるとともに、実践家は研究者として自らの実践の計画、方法、結果に責任をもつことが求められることになる。また、研究と実践の統合の可能性が示唆されている。

また、下山は研究と実践の関連性については4つのタイプに分類し、「実践活動を通して心理学を行う」研究を実践型研究としている。それは「学問としての心理学」に対して「行為としての心理学」であり、そこでは実践的有効性が重要な価値基準となる。

次に、実践型研究における実践性の意味を積極的に評価するため、「関係性」を横軸に、「開放性」を縦軸にとって実践性を構造化している。関係性は実践行為における研究者と対象との間の多様な相互作用のことであり、研究者の意図する影響はこの関係性を通して対象に与えられる。開放性は、現場、あるいは現実生活で生じている混沌や複雑性に対して開けていることであり、実践行為が現実にとれほど広く影響を与えるかに関連する。

「関係性」に注目すると、以下の3点の新たな研究の展開の方向が出てくるとする。

第1点は、「研究者と対象者の関係性を前提として組み入れる研究法」へという方向性である。関係性を積極的に取り上げることが実践型研究である臨床心理学の実践性を高めることにつながる。

第2点は、「対象者あるいは関係性のあり方を理解する契機として研究者の主観的体験を利用する研究法」へという方向性である。研究者の主観的体験は、関係性を媒介として対象者のあり方と連動しており、対象者のあり方を理解する手がかりとなるという。

第3点は、研究者が対象者との間で仮説の生成—実践的試行—検討—修正—実践的試行—検討の過程を繰り返し、それにともなって両者の関係も変化する「循環的 (cyclical) な研究」へという方向性である。心理臨床実践においては「対象者 (クライアント) に関して適切な見立て (仮説) をもちつつ共感的に関わっていくと研究者 (臨床家) と対象者とのあいだに信頼関係が生じ、語られる内容もより深いものとなる。それに応じて仮説の検討、修正がなされ、修正された仮説に基づく援助的対応がなされる。仮説が適切であり、しかもそれが対象者に適切にフィードバックされた場合、対象者に理解されたという安心感が生じ、それで症状が軽減することもあり、さらに仮説の再検討が必要となる」といった循環的な研究過程が生じる」という。

この点に関しては、早い時期に佐治 (1975) が自分自身の面接事例の検討を行い、循環的な面接過程の例を示している。すなわち治療者側の理解がクライアントの洞察を引き起こし、自らの経験を拡大し、深化する。治療者側の理解と経験およびクライアント側の理解と経験が、intersubjective にまた intrasubjective に進行するサイクルがクライアント (および治療者) の成長をもたらす基礎となるとしている。

次に、「開放性」に注目すると以下の3点の研究の展開の方向性が出てくる。

第1点は、「日本語の日常語を重視する研究」へという方向性である。翻訳専門用語は研究者の生きている現実からかけ離れているため、自分が生きている現場から心理学を創る、つまり仮説 (モデル) 生成タイプの質的記述研究を行うとの発想が失われる。また「日本語の日常語には、個人主義を前提とする欧米語では掬えない微妙な関係性をとらえられる可能性がある」(下山、1993; やまだ、1987) とする。

第2点は、「研究対象者自身もその成果を利用できる研究」へという方向性である。すなわち、社会レベルでは、研究自体が社会的サービスという側面をもつことが重要となり、心理臨床の

実践では、問題の質にあわせ、さまざまな人がアクセスでき、利用できる開放性の高い援助方法の開発が必要となる(下山, 1994)。

第3点は、‘社会活動としての研究の発想’へという方向性である。実践型研究は行為としての心理学の側面が強いので、研究を社会的コンテクストに位置づけた場合、実践型研究は社会的行為つまり社会活動となる。現場の実践の意味を社会的コンテクストにおいてとらえ、それとの関連で心理臨床の活動や組織を論じる研究(例えば、下山ら, 1991)が今後必要とされており、心理学者の社会的資格の議論もこのようなコンテクストで行われるべきであると、今後の課題を示している。

さらに、実践型研究の特徴として「循環的仮説生成—検証過程」をあげている。臨床心理学研究では、データ収集の場が対象の生活状況の場であり、その状況は時間軸に沿って形成されたストーリーを備えているので、状況に関する断片的なデータから全体状況を推定する作業は、個々の状況に含まれる断片的ストーリーを読み取ることを通して対象者が生きている全体の状況の物語を読み解いていく物語の構成の作業となる。心理臨床の過程はこの「読み」を深めていくことであり、実践に役立つ仮説を段階的に練り上げていく循環的仮説生成—検証過程に相当している。この「時間性」と「物語性」という特徴は個性記述的研究に馴染みやすく、それが事例研究法に結びつく要因となっているという。しかし、下山は、安易に実践型研究と事例研究法をむすびつける危険性も指摘している。鯨岡(1991)を引用し、記述をとおして研究者の持つ暗黙の理論を明確化するとともに、既存の理論の吟味、批判、新理論の構築を行うことを、記述的研究において重要なこととする。また、先述の「開放性」に注目するとき、循環的仮説生成—検証過程においては、無意識といった内的過程との関連ばかりでなく、対人関係や社会といった外的状況のコンテクストとの関連でストーリーを読み込む仮説の形成が重要となるという。事例研究のもつ特徴を生かして、実践型研究の名に値するものとするためには、厳しい条件が課されるといえよう。

日本心理臨床学会においても、専門用語の検討を行い、その報告がなされた(日本心理臨床学会、教育・研修委員会, 1997)。「事例」については「心理臨床家がクライアントと心理臨床行為をともにするために行う理解と検討に対する一般的総称である。すなわちクライアントの歴史的事実や心的内界、家族・職場(学校)・近隣などにおける対人関係の問題、さらに社会・経済・文化的状況なども視野に入れてクライアントを理解し、クライアントとともにいる関係のなかで解決の方向を探究するものである」としている。ここでも、全体性や関係性の概念が含まれている。

「多数が真実である」との自然科学的発想に基づく限り、事例研究の意義は見い出せないだろう。河合は早くから、その点を示唆していたが、下山に至って、方法論の構造化がなされ、自然科学から人間科学へというパラダイムの転換が明示された。

この転換は他の学問分野においても見られるところである。自然科学のモデルとなっていた物理学においては、ニュートン以来の因果論的な考えが限界を示して、円環論的な見方が取り入れられてきている。

生物学においても「生命科学から生命誌へ」(中村, 1991)のように、現時点で生物を見る見方、いわば時間の要因を切り捨てた見方から、進化の過程を考慮する見方、即ち時間軸をいれ込む見方がでてきている。

心理学もこのような学問体系の大きな転換の中にあり、事例研究は新しい研究方向の可能性を示していると考えられる。

## 事例研究法による母子関係の研究

### 1. 方法

心理学関係の専門誌計13誌に発表されている事例研究の中から、母子関係について考察がされている論文（含研究報告）を検索する。期間は1987年から1996年までの10年間とする。

検索された計45論文について、(1) 面接形態、(2) 面接方法の観点から整理する。

### 2. 結果と考察

検索された論文は以下の通りである（表1-1, 表3-1）。誌名の後の数字は創刊年である。

「心理学研究、1929」 該当論文なし

「教育心理学研究、1952」 該当論文なし

「精神分析研究、1954」 論文番号①～⑩ 計10編

①深津千賀子他（1993）：育児困難を訴える母親の診断と治療—精神力動の特徴と病理—。36(5), 66-79. ②濱田庸子（1993）：境界パーソナリティ構造の母親の子殺し空想と自殺企図—乳幼児を持つ母親の精神療法と母子治療—。36(5), 80-88. ③市田 勝（1993）：「怖い母」と「嫌な父」のイメージを解消していった一女性例。37(2), 41-46. ④小林和（1989）：心身症母娘にみられた女性性獲得をめぐる問題。33(2), 33-41. ⑤水保健一（1993）：境界例治療における攻撃性の背後にあるもの。37(5), 33-40. ⑥中藪久美子（1995）：母親の喪失—幼児虐待の一症例から—。39(5), 39-44. ⑦小牟田豊美（1996）：赤ちゃんにより死の恐怖を呼び起こされた母親の一症例。40(1), 33-38. ⑧高野佳也（1997）：かわいそうな自分であり続けること—マゾヒスティックな患者と治療者の逆転移—。41(1), 21-29. ⑨植村 彰（1992）：繰り返し暴言を与える母親とそれを受ける子供。36(2), 30-36. ⑩牛島定信（1990）：思春期症例にみる両親像と現実の夫婦関係。34(1), 37-44.

「児童青年精神医学とその近接領域、1960」論文番号⑪～⑭ 計4編

⑪本城秀次他（1989）：9歳で摂食障害を呈した女兒症例について— anorexia nervosa および児童期の depression の視点から—。30(4), 49-60. ⑫上別府圭子（1996）：母親の個体化（individuation）と前思春期の発達—年少型強迫性障害症例の母親の治療を通して—。37(4), 27-42. ⑬武井 明他（1993）：11歳女兒のトリコチロマニアの治療過程について。34(2), 14-21. ⑭竹内淳子他（1995）：描画療法で改善した心因性難聴の小学生女兒2例について。36(3), 28-39.

「カウンセリング研究、1968」論文番号⑮～⑯ 計2編

⑮藤井 弘（1992）：中年期の母親に対する時間制限心理療法。25(2), 68-76. ⑯長尾博（1987）：登校拒否を示す青年をもつ母親の性格特性と母子の治療的展開との関連。20(1), 1-10.

「精神療法、1974」論文番号⑰～⑱ 計3編

⑰鈴木智美（1993）：摂食障害例における母親の mourning work が果たした治療的役割—母子同席面接を通して—。19(5), 47-55. ⑱巽 信夫（1990）：一女性境界例患者に対する自立にむけての援助—分離・個別化課題達成を軸に—。16(2), 17-24. ⑲牛島定信（1987）：神経性無食欲症にみるかぐや姫コンプレックス。13(3), 48-58.

「臨床心理ケース研究、1977」 該当論文なし

表1-1 面接の形態による分類

誌名	論文数	親		子		子どものみ	母親のみ
		同じセラピスト		別のセラピスト			
		同席	別の日	並行	別の日		
精神分析研究	8	②女2才#23-36 ⑦男0才5ヶ月	⑨男19才	④女16才		③女37才 ⑤女24才 ⑧女24才	②#1-22, #37-93 ⑥女幼児
	2	⑩-2女17才	⑩-3男24才				①性別不明1-10 ⑩-1女14才
児童青年精神医学 とその近接領域	2 *⑪		⑬女11才				
	2			⑫1女10才 ⑭-1女小6, -2女小3			⑫-2男12才
カウンセリング研究	1						⑮男16才
	1 *⑯ -1,8,9			⑯-4女14才, -5男16才#1-14 -6女12才#1-4 -10女18才,男16才, 男12才			⑯-2女12才, 3男15才, -5男16才 #15-34, -6#5-40, -7女18才
精神療法	2	⑰女17才週1回				⑰週2回 ⑱女23才	
	1	⑲-1女17才 初9ヶ月間				⑲-1後9ヶ月間. ⑲-2女25才	
心理臨床学研究	12			⑳女小1 ㉒女小1 ㉑女9才 ㉓女4才 ㉔男12才 ㉕男小4	㉖女16才	㉑女22才後 2年間. ㉓女35才	㉑初2年間 ㉒女高2 ㉓女11才 ㉔女13才
	2 *㉗		㉔-1女17才 -2女17才				
心理臨床 ケース研究	2			㉘女11才 ㉙男9才			
箱庭療法学 研究	6		㉚女12才		㉛女16才	㉜女11才 ㉝女8才 ㉞男14才 ㉟女6才	
心理臨床	1			㉠男小2			
発達心理学 研究	1						㉡-1男双子4 -25ヶ月間. -2男3-24ヶ月. -3女3-20ヶ月
思春期青年期 精神医学	2					㉢女21才 ㉣女18才	

- ・①～④⑤は、論文番号。
- ・「論文数」欄の上段は単一事例 (N=1) を、下段は複数事例 (N=2以上) を示す。「発達心理学研究」については複数事例のみ。
- ・面接形態が移行または重複しているものは、各々に記入している。
- ・母親 (M) の年齢は25～56才である。
- ・\*について ⑪, ㉗面接形態不明  
⑯並行面接と合同面接



「心理臨床学研究、1983」 論文番号⑳～㉓ 計14編

- ⑳橋本やよい (1996)：母親の移行対象論—体感から分離へ—。13(4), 365-376。㉑服部孝子 (1992)：境界例の女性との心理療法過程。10(1), 17-28。㉒平松清志 (1989)：場面緘黙児の母親面接。7(2), 52-59。㉓今井暁式 (1993)：拒食症の娘をもつ母親の援助—思いやることができるまで—。11(1), 25-35。㉔井村たかね (1995)：夫婦間および親子間の葛藤と女子少年の非行。13(2), 157-168。㉕上地雄一郎 (1991)：思春期危機を契機に発症した抑うつに対する精神分析的な心理療法の一例。8(3), 29-41。㉖小林弘子 (1995)：内なる母娘関係の変容—抜毛を呈した女兒の母親との面接過程—。13(2), 180-190。㉗三木 都他 (1994)：登校拒否から来院拒否へ—小学校3年生女兒の遊戯療法と並行母親面接から—。12(3), 217-228。㉘中山美智子 (1996)：世代間に見る投影性同一視と真の自己の達成—「思春期不登校 A 子」の母親治療面接—。13(4), 377-389。㉙鈴木真弓 (1996)：遊戯療法過程による心的外傷としての分離体験への効果に関する一考察—円形脱毛症女兒の事例を通して—。13(4), 390-402。㉚鈴木 龍 (1989)：親密さへの願望と脱出への強迫—人生半ばに達した「永遠の少年」pure aeternus の一事例—。7(1), 45-56。㉛竹松志乃 (1994)：チック・強迫症状を呈した中学生男児の事例—チック症者の“仮面性”について—。12(3), 229-240。㉜棚瀬一代 (1996)：実母による乳幼児虐待の発生機序について—事例分析による検討—。13(4), 427-435。㉝吉田弘道 (1990)：砂場遊びにみる、ある登校拒否児の人格形成過程。8(2), 54-65。

「心理臨床ケース研究」(1983) 論文番号㉞～㉟ 計2編

- ㉞弘中正美 (1988)：ピーターパンの母親探し—ある登校拒否児の母親面接過程—。6, 3-22。㉟田中信一 (1988)：箱庭を通して、自分だけの世界から外の世界へ向かっていった少年—母親イメージの変容—。6, 117-131。

「箱庭療法学研究、1988」論文番号㊱～㊴ 計6編

- ㊱安藤嘉朗 (1990)：家イメージを中心に展開した神経症少女の箱庭療法過程。3(2), 68-78。㊲荒川由美子 (1988)：抜毛癖を呈した一少女の箱庭療法過程。1(1), 38-46。㊳橋本やよい (1995)：箱庭の物語が「生きられる」ようになるまで—ある思春期心身症少女の箱庭—。8(2), 3-14。㊴奈良英子 (1991)：登校拒否中学生への箱庭療法。4(1), 38-47。㊵西村喜文 (1992)：身体症状を示す登校拒否児女兒への箱庭療法過程。5(1), 62-73。㊶菅佐和子 (1991)：母性とのかわりという視点からみた心因性視覚障害児の箱庭療法。4(2), 24-36。

「心理臨床、1988」論文番号㊷ 計1編

- ㊷淀 直子 (1995)：太母からの少年の自立。8(2), 117-125。

「発達心理学研究」(1990) 論文番号㊸ 計1編

- ㊸氏家達夫他 (1994)：3人の母親：その適応過程についての追跡的研究。5(2), 123-136。

「思春期青年期精神医学、1991」論文番号㊹～㊺ 計2編

- ㊹小寺隆史 (1995)：女性の心理的発達に関する一試論—過食症症例の面接過程と夢の分析を通じて—。5(1), 63-76。㊺館 直彦 (1991)：摂食障害における自己の病理と母子関係の病理をめぐって—Winnicott の情緒発達論の視点から—。1(2), 157-168。

(1) 年齢差と性差 (表2)

最も多い年代は児童期、次が中・高生の年代である。親子関係に問題をはらみやすい時であ

るため当然の結果であるが、大学生・成人の比率もかなり高くなっていることに注目したい。現実レベルでの母子関係はすでに分離している時期であるが、心理的な問題として母子関係の処理が成人期にまで持ち越されていると考えられる。このような事例においては、母親イメージの修復という内的な作業が中心になると予想される。今後、内容の検討を行っていきたい。

表2 年齢と性差

(人)

	乳児	幼児	児童	中学生	高校生	大学生	成人	計
男	1	0	3	2	1	1	0	8
女	1	2	10	2	6	2	5	28
計	2	2	13	4	7	3	5	36
(%)	(5.6)	(5.6)	(36.1)	(11.1)	(19.4)	(8.3)	(13.9)	(100.0)

注) N=1の論文のみ対象。

表3-1 面接の方法による分類

誌名	カウンセリング		遊戯	夢	箱庭	描画
	母親	子ども				
精神分析研究	*①-1,4,12 ②④⑥⑦⑨ *⑩-1,2	③④⑤⑧ ⑨*⑩-2,3	②	③		
児童青年精神医学とその近接領域	⑪ ⑫-1,2 ⑬ ⑭-1,2	⑪ *⑫-1,2	⑬			⑬ *⑭-1,2
カウンセリング研究	⑮ *⑯-1,2,3,4,5,6,7,8,9,10	*⑰-1,4,5,6,8,9,10				
精神療法	⑰⑱	⑰⑱ *⑲-1,2				
心理臨床学研究	⑳㉑㉒ ㉓*㉔-1,2 ㉕㉖㉗㉘ ㉙㉚㉛	㉑ *㉔-1,2 ㉕㉖	㉑㉒㉗ ㉙㉚	㉓		㉓
心理臨床ケース研究	㉜㉝		㉜		㉝	
箱庭療法学研究	㉞㉟				㉞㉟㊱㊲ ㊳㊴	㊳
心理臨床	㊵		㊵			
発達心理学研究	*㊶-1,2,3					
思春期青年期精神医学		㊷㊸		㊷		

注) ・①-2,3,5~11及び,㉓論文については、面接方法不明。  
 ・\*については、複数事例。  
 ・面接方法が移行または重複しているものは、各々に記入している。

(2) 年代による面接形態の違い (表1-2)

面接形態で最も多いのは本人面接の14事例、次に並行面接が10事例、親面接が7事例である。年代と面接形態の関連をみると、乳幼児期は並行面接が1事例、親面接が2事例であり、同席面接が併用されている。乳幼児をもつ母親にとって、子どもの問題というより、自分自身が親になっていくための面接になっていると予想される。

児童期はやはり並行面接が最も多い。母子双方が面接によってその関係を変化させていくのには最も適した年代といえるだろう。その関係もダイナミックに変化すると予想される。

思春期には多様な面接形態がとられている。前の児童期のように母子の並行面接でもなく、次の成人期のように本人面接でもない。子どもによって精神的な発達に最も差のみられる年代であることと併せて、自立と依存の葛藤の時期である思春期の特徴を示している。

表1-2 年代と面接形態 (人)

	同じセラピスト		別のセラピスト		子どものみ	母親のみ	不明	計
	同席	別の日	並行	別の日				
乳 幼 児	2	0	1	0	0	2	0	5
児 童	0	1	7	0	3	1	1	13
中学・高校生	1	1	2	2	3	3	0	12
大学生・成人	0	1	0	0	8	1	0	10
計	3	3	10	2	14	7	1	40

注) N=1の論文のみ対象。面接形態の重複あり。

表3-2 年代と面接の方法 (人)

	カウンセリング		遊 戯	夢	箱 庭	描 画	計
	母親	子ども					
乳 幼 児	4	0	2	0	0	0	6
児 童	9	1	6	0	4	1	21
中学・高校生	9	3	1	1	3	2	19
大学生・成人	3	9	0	2	0	0	14
計	24	14	9	3	7	3	60

注) N=1の論文のみ対象。面接方法の重複あり。

(3) 年代による面接方法の違い (表3-2)

児童期は1事例以外は遊戯療法と箱庭療法による面接であり、描画も併用されている。

児童期にあっては、箱庭も遊戯の一種として遊びの中で使われることが多いので、遊びの重要性を示している。

中・高生になってカウンセリングが使用されるようになってくる。箱庭も使われており、少数ではあるが夢による内的表現もされるようになる。面接形態と同様、その方法においても多様性が特徴になっている。

大学生・成人になると、やはりカウンセリングが主流を占めるようになり、カウンセリングの中で夢の報告もされるようになる。

各年代において自己表現の方法が変化することが示されている。

表現方法と表現される内容との関連については今後各論文を検討してみたい。

母親の面接についてはすべての事例でカウンセリングが使われている。子どもの問題を主訴とする来談であるので意識的レベルに焦点が合わせられるため、当然の結果といえよう。例外として、乳幼児期の2例については‘母子治療’の考え方により同席面接が取り入れられている。報告はまだ少ないが、今後このような母子をセットとする治療も行われるようになるだろう。

#### (4) 複数事例を扱う事例研究

複数の事例を扱っている論文は45編中9編である。事例数としては論文①と⑬が10事例、論文⑩と⑭が3事例、論文⑫、⑭、⑳、㉕、㉓、⑳が2事例である。複数事例から共通性を見い出そうとする試みであるが、統計的処理が可能な事例数を集めるのは個人研究のレベルでは難しい。先述したように‘個を深く追究して普遍に至る道’が事例研究の特性を生かすことになると考えられる。

#### 要 約

臨床心理学における研究法としては、関係性と時間軸を組み込む事例研究法が使われることが多いが、問題点の指摘もされている。

本論では、事例研究法に関する文献展望をおこない、事例研究法の意義を見出すためには、多を是とする自然科学から‘個の普遍性を認めていく人間科学’へとパラダイムの転換が必要なことを示した。

次に、心理学関連の専門誌13誌から、母子関係の考察がされている事例研究法による論文を検索した。計45論文について面接形態と面接方法の観点から整理した。内容の検討をおこない、心理療法による母子関係の変化についての仮説を見出すのが次の課題である。

付記；本稿は平成9年度名古屋女子大学特別研究費助成による成果の一部である。

#### 引用・参考文献

- Allport, G. W. (1942) : The use of personal documents in psychological science. *Social Research Council*. 大場安則訳 (1970) : 心理学における個人記録の利用法. 培風館.
- 浅海敬子 (1990) : 臨床心理学における事例研究法を考える (1). 山王教育研究所年報, 1, 75-91.
- Bolgar, H. (1965) : The Case Study Method. B. B. Wolman(ed). *Handbook of Clinical Psychology*, MacGraw-Hill, 28-39.
- Bowlby, J. (1982) : Attachment and Loss. 1 Attachment : *The Tavistock Institute of Human Relations*. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一訳 (1991) : 母子関係の理論, I 愛着行動. 岩崎学術出版.
- Bowlby, J. (1973) : Attachment and Loss. 2 Separation : Anxiety and Anger. *The Tavistock Institute of Human Relations*. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳 (1977) : 母子関係の理論, II 分離不安. 岩崎学術出版社.
- Bowlby, J. (1980) : Attachment and Loss. 3 Loss : Sadness and Depression. *The Tavistock Institute of Human Relations*. 黒田実郎・吉田恒子・横浜三恵子訳 (1981) : 母子関係の理論, III 対象喪失. 岩崎学術出版社.
- Call, J. et al. (1981) : *Frontiers of Infant Psychiatry*. New York: Basic Books. 小此木啓吾監訳 (1987) : 乳幼児精神医学. 岩崎学術出版.
- De Grott, A. D. (1969) : *Methodology Foundation of Inference and Research in the Behavioral Science*. Hague: N. V. Uitgeverij Mouton. 岩脇三朗・梅本 堯監訳 (1976) : 行動科学の方法. ミネルヴァ書房.
- Dukes, W.F. (1965) : N=1. *Psychological Bulletin*, 64, 74-79.
- 藤縄 昭 (1976) : 事例研究随感. 臨床心理事例研究. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 6-8.
- Giorgi, A. (1970) : *Psychology as a Human Science : A phenomenologically based approach*. Harper & Row. 早坂泰次郎訳 (1981) : 心理学と科学に関する結論. 現象学的心理学の系譜. 勁草書房, 162.
- 星野 命 (1970) : 事例研究の意義と諸問題. 片口安史・岡部祥平編, ロールシャッハ法による事例研

## 事例研究法による母子関係の研究

- 究. 誠信書房, 223-233.
- 細木照敏 (1968): 臨床心理学におけるケース研究. 臨床心理学講座1 臨床心理学の基礎. 黎明書房, 291-293.
- 石郷岡泰 (1969): 臨床心理学における理論構成の問題. 北村晴朗・安倍淳吉・黒岡正典編, 心理学研究法. 誠信書房, 583-595.
- 岩立志津夫 (1990): 事例研究のあり方と発表の仕方をめぐって. 発達心理学研究, 1(1), 79.
- 河合隼雄 (1976): 事例研究の意義と問題点—臨床心理学の立場から—. 臨床心理事例研究. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 9-12.
- 河合隼雄・佐治守夫・成瀬悟策 (1977): 臨床心理学におけるケース研究. 臨床心理ケース研究1, 誠信書房, 231-254.
- Korchin, S. J. (1976): Modern Clinical Psychology. *New York: Basic Books*. 村瀬孝雄訳 (1980): 現代臨床心理学. 弘文堂, 52.
- 鯨岡 峻 (1991): 事例研究のあり方について—第1巻第1号意見欄の岩立論文を受けて—. 発達心理学研究1(2), 148-154.
- Leitenberg, H. (1973): The use of single-case methodology in psychotherapy research. *Journal of Abnormal psychology* 82, 87-101.
- Lewin, K. (1935): A Dynamic Theory of Personality Selected Papers. *New York: McGraw-Hill*. 相良守次・小川 隆訳 (1957): パーソナリティの力学説. 岩波書店.
- Lorenzer, A. (1974): Die Wahrheit der Psychoanalytischen Erkenntnis. *Frankfurt: Suhrkamp Verlag*. 河田 晃訳 (1985): 精神分析の認識論. 誠信書房.
- Mahler, M. S. (1975): The Psychological Birth of the Human Infant. *Basic Books*. 高橋雅士・織田正美・浜畑 紀訳 (1981): 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個性化—. 黎明書房.
- 中島 誠 (1976): 発達心理学からみた臨床事例報告の意義. 臨床心理事例研究. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 5.
- 中村桂子 (1991): 生命科学から生命誌へ. 小学館.
- 中村雄二郎 (1992): 臨床の知とは何か. 岩波書店.
- 日本心理臨床学会・教育・研修委員会 (1997): 専門用語の検討について. 心理臨床学研究, 15(3), 322-333.
- 小川捷之・小此木啓吾・河合隼雄・中村雄二郎 (1986): 事例研究とは何か. 心理臨床学研究, 3(2), 5-37.
- 小此木啓吾・渡辺久子編 (1989): 乳幼児精神医学への招待. 別冊「発達」9. ミネルヴァ書房.
- 荻阪良二 (1976): 臨床心理学と Case study. 臨床心理事例研究. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 1-4.
- Reisman, J. M. (1976): A History of Clinical Psychology. *Irvinction Publishers*, 43. 茨木俊夫訳 (1982): 臨床心理学の歴史. 誠信書房.
- Robinson, P. W. & Foster, D. F. (1979): Experimental Psychology: a Small-N Approach. *Harper & Row*.
- Rogers, C. R. (1969): Toward a science of the person. *Sutich, A. J. & Vich, M. A. (Eds.), Readings in humanistic psychology. The Free Press*. 小口忠彦編訳 (1977): 人間性の探求. 産業能率短期大学出版部.
- Runyan, W.M. (1983): Ideographic goals and methods in the study of lives. *Journal of personality*. 51, 413-437.
- 佐治守夫 (1975): 治療的実践研究—ある事例についての治療的面接の検討—. 続 有恒・高瀬常男編, 心理学研究法13 実践研究. 東大出版会, 149-181.
- 下山晴彦・峰松 修・保坂 亨・松原達哉・林 昭仁・斉藤憲司 (1991): 学生相談における心理臨床

- モデルの研究—学生相談の活動分類の媒介として—. 心理臨床学研究, **9**(1), 55-69.
- 下山晴彦 (1993): 心理療法過程における関係性の研究—日本の“気”と“間”を媒介として—. 心理臨床学研究, **10**(3), 4-16.
- 下山晴彦 (1994): 「つなぎ」モデルによるスチューデント・アパシーの援助—「悩めない」ことを巡って—. 心理臨床学研究, **12**(1), 1-13.
- 下山晴彦 (1996): 心理学における実践型研究の意義—臨床心理学研究法の可能性をめぐって—. 心理学評論, **39**(3), 315-337.
- Symonds, P. M. (1939): *Psychology of Parent-Child Relationship*. *New York: Appleton-Century Co.* 依田明訳 (1968): 性格心理学. 金子書房.
- 津留 宏 (1952): ケース・スタディとは何か. 事例研究法. 黎明書房, 7-24, 25-49.
- 梅本堯夫 (1974): 臨床心理学における研究論文の意義. 臨床心理事例研究. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要, **1**, 1-2.
- Winnicott, D. W. (1965): *The Maturation Processes and Facilitating Environment*. *Hogarth Press, London*. 牛島定信訳 (1977): 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版.
- やまだようこ (1987): ことばの前のことば. 新曜社.
- やまだようこ・下山晴彦 (1997): 単一事例研究の展開と方法論的課題. 教育心理学年報第36集, 12-17.
- 吉村浩一 (1989): 心理学における事例研究法の役割. 心理学評論, **32**(2), 177-196.